

民主島根

2022年
12.18
第1418号

発行所 松江市袖師町3-6 TEL 0852-24-2444
日本共産党島根県委員会 FAX 0852-24-6369

統一協会関係者がいたシンポ後援取り消しを 県が反社会的団体催し 後援取り消し規定

尾村・大國県議 11月県議会の論戦から



一般質問に立つ尾村県議(写真上)と一問一答質問する大國県議(写真下)

日本共産党の尾村利成県議は11月30日、一般質問に、大國陽介県議は6日、一問一答質問に立ち、統一協会問題などで県知事や教育長、県執行部等をたどりました。(2面に続く)

県政の信頼取り戻すべき
尾村県議は県教育委員会が後援して2020年に開かれた島根人格教育シンポジウムのパネリスト4人のうち3人が統一協会関係者だったと指摘し、「後援を取り消し、県政への信頼を取り戻すべきだ」と迫りました。

丸山達也知事は「旧統一協会に限らず、県が反社会的な行為が指摘される団体と関係を持つことで、団体の信用を高めることは避けなければならぬ」と説明。「法律的な

整理をし、(全庁的に)取り消し規定を統一して一定の基準を設ける方向」と応じました。

「関連団体」の活動の一環
大國県議は、真の家庭運動推進島根協議会(APTF島根)や天宙平和連合(UPF)の付設機関である平和大使協議会、統一協会の関連団体だと指摘。APTFF島根のホームページに「島根

尾村県議の一般質問

2号機再稼働同意の撤回を

岸田政権は「原則40年、最長60年」とした原発の運転期間の法律規定撤回を狙っています。尾村県議は、国が原発の60年を超える長期運転を可能にする安全規制の見直しを検討している

人格協議会」の活動が平和大使活動として掲載されていたことを示し、県教委が後援してきた同会が主催する島根人格教育シンポジウムについて「統一協会の関連団体の活動の一環だ」と述べ、県の認識を質しました。

太田史朗政策企画局長は「平和大使活動の一つなら統一協会の関連団体と言えない」と認めました。

大國県議の一般質問

困窮者の一時保護施設整備を

長期化するコロナ禍のもと、住宅の確保に窮する方が増加し、施策の充実・強化が求められています。国においては、生活困窮者への家賃補助・特例措置の恒久化が検討されていることを受け、大國県議は、期限の定めのない家賃補助制度の必要性を強調しました。

安食治外健康福祉部長は「実態を把握するとともに政府の見直しの動向を注視していく」と答弁。

また、大國氏は、出雲市内において、社会福祉協議会や生活保護の担当

が生じる事柄と言え」と答弁しました。

また、尾村氏は、新型コロナウイルス第7波では、県内46病院のうち、①外来制限9病院②入院制限22病院③救急制限9病院④手術制限13病院が発生し、医療従事者からは「現行の広域避難計画では、事故時の対応は不可能」との声が出されていることを紹介。「第7波を超える感染者が第8波で発生し、原発事故が起きれば、転院を余儀なくされる入院患者はおろか、高齢者や基礎疾患を抱えた方々が、避難先の医療機関で十分な医療を受けることができないことは火を見るよりも明らかだ」と訴えました。

サルボウガイ養殖・中海の漁業振興を

中海ではサルボウガイの復活をめざし、養殖生産の拡大に向け、官民一体で懸命の努力が進められてきましたが、気候変動のもと、今夏も大雨や猛暑などの影響を受けました。

大國県議は「漁業者が絶えず変化する中海の環境を把握し、予測する

丸山知事は「山陽3県の避難先で受け入れが難しい場合、四国や関西地方の府県などと災害連携協定による支援を受け、県のみで受入先の確保が実務上できない場合には、政府において対応するとの回答を得ている」と適切に対応できるものと考えている」と強弁。

尾村氏は再質問、再々質問で、避難計画に実効性があるとの認識は県が新たな安全神話をふりまくことになる」と指摘。「現行の避難計画では県民の命は守れず、転院する過程で重篤な人の病状が悪化し、命の危機につながる」となる。2号機の再稼働同意は撤回せよ」と強く求めました。

ど、行政の責任で対応すべきだ」と迫りました。

安食健康福祉部長は、緊急に住まいが必要な方に衣食住を提供する「一時生活支援事業」(県内2市1町が実施)を市町村に働きかけていくと答えました。

西村秀樹農林水産部長は「自然環境の変化に対する対応に課題がある」と述べた上で「技術指導や助言等を引き続き行っていく」と答えました。

鼓動

映画監督の山田洋次氏は、ある新聞紙上で「母は開放的で華やいだ雰囲気の人で、日本の因習や軍人を嫌い、戦争中でもモンペをはかず、禁止されていたパーマもかけていた。僕はこの明るく楽天的な母が好きで仲もよかった」と、明治生まれの母を振り返る▼しかしそんな母から、大学一年の時に「好きな人が出来て、追われるように家を出た」という手紙が突然届き、茫然自失に。父と離婚したのだ。当時、弟はまだ中学生。後年、瀬戸内寂聴さんに「弟がかわいそうだった」というと、「しょうがないじゃないか。一人の女が幸せになるために誰かが犠牲になつてしまう。それが人間というもの」と言い放った。「その時、僕は背筋が伸びた気がした」と▼母は再婚後、自立するため、英語教師の資格を取ろうと40代半ばで大学に入学。「母は逆境にあつても前を向いて生きる人で、歳をとってもゼロから新しい生活へ羽ばたこうとするバイタリテイには驚いた」と。その後、再婚相手が見つけると、自分で縁談を見つけてきて、60歳にして3度目の結婚を選択したという▼91歳まで生きた母は、死に際「洋次、私は決して後悔してないからね」とつぶやいた。愛するわが子を残して、周囲の冷たい視線と悪罵の中、家を出て行くのはどんなに辛かったことか。しかし恋と自由、女の幸せを求めて新天地へと飛び出した。ただでさえ女性が思い通りに生きるのが容易でない戦後の混乱期を、心に素直に自分が生きたいように生き抜いたのだ。それは「人はいつからでも新しくなれる」という寂聴さんの生き様にも通じていた。(吉)